

平成11年度
 帰国研修員フォローアップ調査団報告書
 - 博物館技術コース -

平成12年 6 月

JICA LIBRARY



J1160202 (6)

国際協力事業団
 大阪国際センター



大阪セ

JR

99-7

平成11年度
帰国研修員フォローアップ調査団報告書
ー博物館技術コースー

平成12年6月

国際協力事業団
大阪国際センター



1160202 (6)

序文

この報告書は国際協力事業団大阪国際センターが実施している集団研修「博物館技術コース」（平成6年度開始）に参加した帰国研修員に対するフォローアップ事業の一環として派遣した調査団によって現地での調査内容をまとめたものです。

本調査団は平成12年1月29日から2月9日までの12日間、タイ、ラオス2カ国において、帰国研修員の所属先機関、現地の博物館等を訪問し、帰国研修員の活動状況、当該分野における各国の実情の把握につとめ、必要に応じ技術的な助言を行いました。同時に各訪問国においてセミナーを開催し、日本の博物館の現状、21世紀の博物館の役割について講演を行いました。

本報告書が当該分野における各国の実状、問題点及び研修にかかる要望事項等について関係各位のさらに深いご理解を頂くための一助となり、今後の研修コース、また研修員受け入れ事業の改善に役立てば幸いです。

なお、本調査団の派遣にあたりご協力を賜った国立民族学博物館、吹田市立博物館、国際開発ジャーナル社、並びに現地において数々のご指導を賜った在外公館並びに関係機関の方々に厚くお礼申し上げます。

大阪国際センター
所長 田上 実

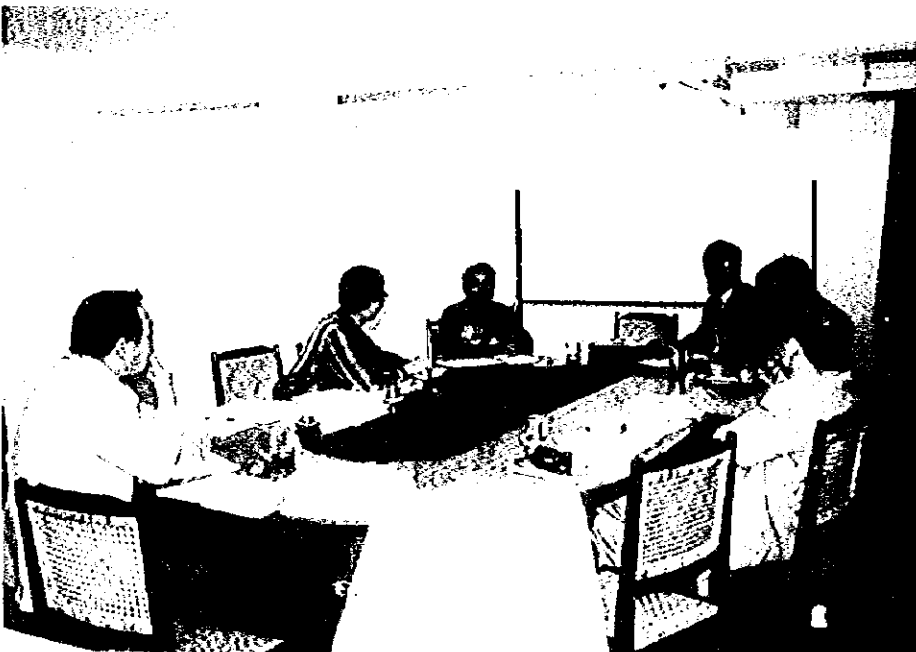
ラオス



国立歴史博物館視察



情報文化省
博物館・考古局長との面談

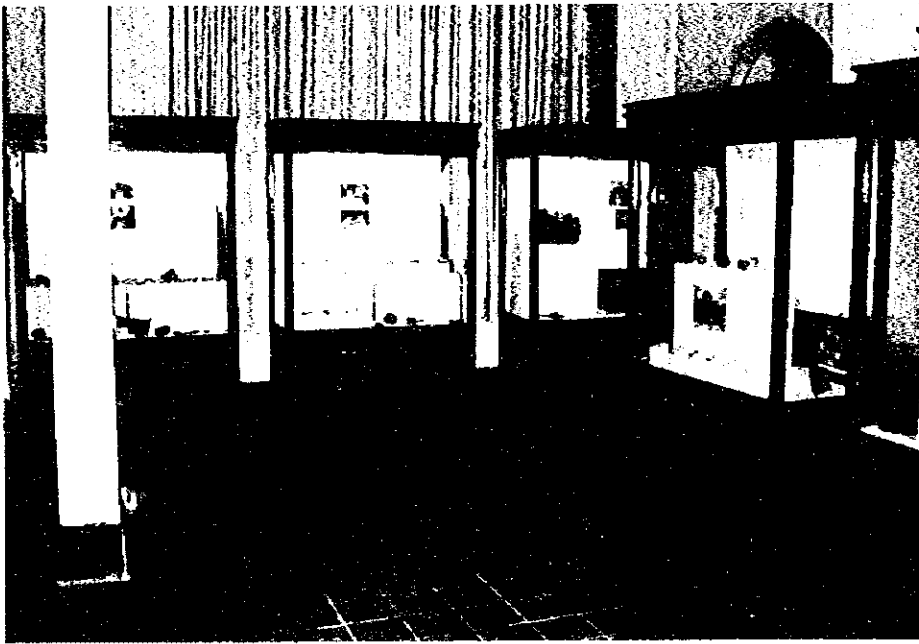


帰国研修員との面談

ラオス



国立歴史博物館の
展示導入部
(制作中の風景)



国立歴史博物館
1階 考古資料の展示



国立歴史博物館
2階 革命資料の展示



帰国研修員との面談

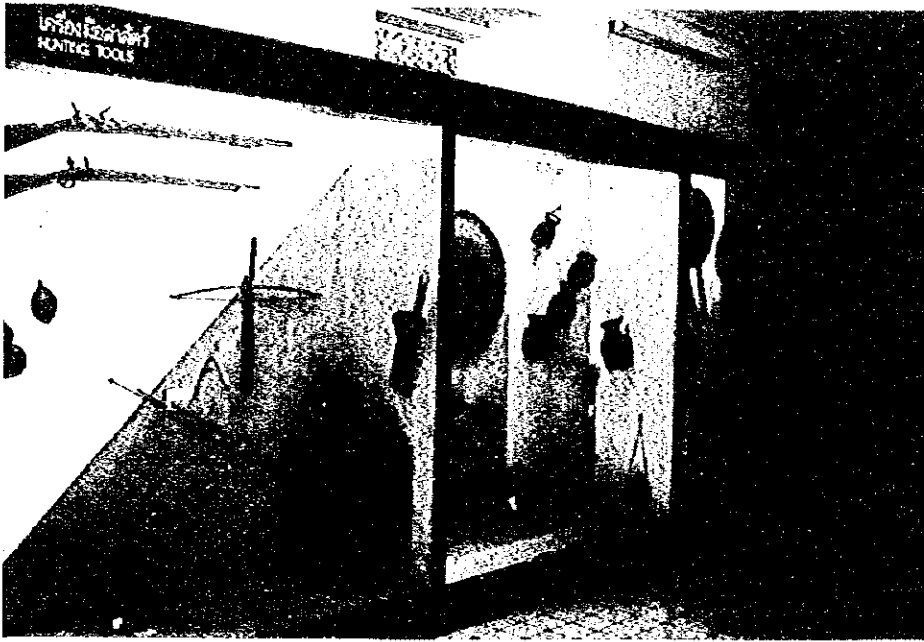


教育省芸術局との懇談会



公開セミナー実施風景

タイ



ナン国立博物館の
民具の展示意匠



ナン国立博物館の
ジオラマ展示



カンベンペト国立博物館
1階の展示室

目 次

序 文 写 真 目 次

I. コースの概略	
(1) 目的・背景	1
(2) 目 標	1
(3) 研修項目・方法	1
(4) 研修実施体制	3
(5) 平成11年度研修日程	4
(6) 国別年度別受入実績	7
II. 調査団の概要	
(1) 派遣目的	8
(2) 団員構成	8
(3) 調査期間	8
(4) 調査日程	9
(5) 帰国研修員名簿	10
(6) 主要面会者	11
III. 各訪問先における具体的状況	
1. ラオス	
(1) 帰国研修員面談結果	13
(2) 帰国研修員への質問票集計結果	15
2. タ イ	
(1) 援助窓口機関の状況	17
(2) 帰国研修員面談結果	21
(3) 帰国研修員への質問票集計結果	24
IV. 公開技術セミナー実施内容	
(1) セミナープログラム	26
(2) 実施状況	26
(3) 参加者との質疑応答	26
(4) セミナー成果及び実施状況	28
V. 文化分野の技術協力「博物館技術コース」その評価と提言	30
VI. おわりに・付言	34

添付資料

I. 博物館技術コースの概略

1. コースの目的・背景

開発と経済発展は多くの開発途上国にとって優先課題であるが、一方ではそれにと
もない各国の貴重な伝統文化が十分な保護を受けず失われつつある。このような状況
の中で、伝統文化の保護・継承あるいは伝統文化を取り巻く環境の保護は重要性を増
している。伝統文化の収集、保存、展示の役目をする博物館は、自国民に対して実物
教育を通じて民族文化を認識させる機能を有するのみならず、外国人に対して自国の
文化を総合的に紹介する機関として、経済発展につながる観光事業の振興・整備のた
めの重要な要素となっている。その意味で博物館機能の見直し・整備は開発途上国の
教育、文化、経済の発展に寄与するものと考えられる。

本コースはわが国の近代博物館の役割と機能を、その整備過程で蓄積されたさまざ
まな知識・技術・経験・成果を紹介することにより、広い視野にたった伝統文化や自
然環境の保存と活用、教育文化の拠点作り、ならびに観光事業の推進などに貢献し得
る博物館の管理・運営の指導者育成を目的とする。

2. 到達目標

- (1) 博物館が持つ基本的な諸機能を十分に理解する。
- (2) 資料収集、保存、展示、教育普及、その他博物館の活動に必要な専門技術の1
つ以上について十分な知識と技術を習得する。

3. 研修項目・研修方法

(1) 研修方法

- a. 研修前半の約3カ月は共通講座として、博物館技術全般に関する理解を深め
るための講義、実習、見学を実施する。
- b. 研修後半の約2カ月は専門講座として、研修員の専門とする分野を博物館に
おいて研修する。
- c. 研修最後の1週間はディスカッション、レポート作成を中心に実施する。ま
た研修成果の発表会を開催する。

(2) 研修項目

- a. 共通講座（講義と実習）

カントリーレポート	(通常の発表会に加え、公開に適するものについては別途公開発表会を開催)
博物館論概論	(博物館の社会的意義概念、日本の博物館制度、博物館と文化財、博物館の研究活動)
博物館の経営	(博物館の組織、文化行政と博物館、職員の研修、観光事業と博物館、賃貸契約、保険、食堂・売店等の付帯事業、その他)
資料の収集と整理	(収集の概念、目録の製作、資料の計測、形状の記録、写真の撮影と処理、映像記録、資料の点検など)
展示計画	(展示シナリオの作成、展示計画と展示図画、展示照明、模型・模写・模造の技法)
保存管理	(収蔵施設の条件、展示・保存環境の科学的管理、資料の復元と修理、輸送と梱包)
教育広報事業	(博物館・市民・学校、体験学習、広報活動、博物館教育と教材他)
設備と保安	(博物館建設と設備、防犯と防災、身障者対策など)

b. 専門講座

参加研修員は応募の際に下記の4つのテーマのうち1つを選択する。併せて、来日後の運営委員によるインタビューにより各研修員の希望と専門を確認し、それぞれの研修員が専門とする分野の博物館にて専門講座研修を実施する。

- テーマ
- (1) 博物館経営
 - (2) 展示計画
 - (3) 保存・修復
 - (4) 教育広報事業

c. その他

共通講座補講、ディスカッション
レポート作成、発表会、評価会

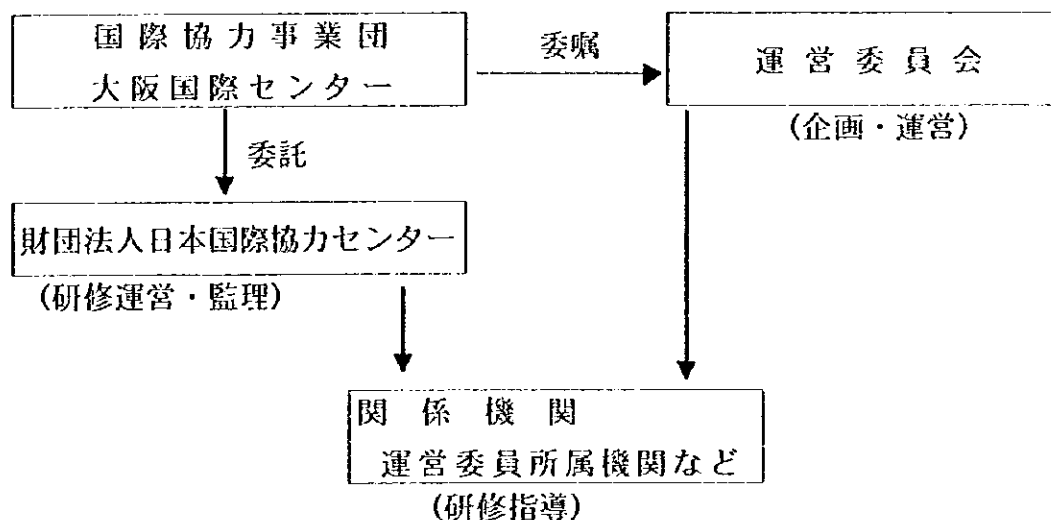
4. 研修実施体制

(1) 実施体制概略

国際協力事業団は、学識経験者で構成する運営委員会から企画・運営全般に関する協力を得るとともに、研修実施委託契約に基づき財団法人 日本国際協力センターに本コースの研修運営を委託する。

さらに同事業団は本コースの効果的運営のために研修監理業務（通訳・同行業務など）を財団法人 日本国際協力センターに委託し、研修監理員の配置を行う。

これら業務の流れは以下のとおりである。



(2) 研修運営機関

a. 研修実施機関

国際協力事業団 大阪国際センター

b. 主な研修指導・協力機関（平成11年度）

- イ. 国立民族学博物館
- ロ. 奈良国立文化財研究所
- ハ. 大阪市立美術館
- ニ. 立命館大学国際平和ミュージアム
- ホ. 吹田市立博物館
- ヘ. 名古屋工業大学
- ト. その他

c. 研修管理業務委託機関

(財) 日本国際協力センター

5. 平成11年度 博物館技術コース 研修日程 (実施済)

月日	曜日	時間	形態	研修項目	講師/見学先	研修場
8/2	月			来日		
8/3	火	9:40-15:00		フリーフィン	JICE フリーフィン	OSIC
8/4	水			オリエンテー		
8/7	土			バスツアー		
8/8	日					
8/9	月	10:00-16:00		日本語集中講習		OSIC
8/20	月					
8/21	土					
8/22	日					
8/23	月	10:00-12:30	L	博物館の社会的意義概念とその組織	国立民族学博物館 教授 森田 恒之	OSIC
		13:30-16:00	L	博物館の社会的意義概念とその組織		
8/24	火	10:00-16:00	LD	博物館の社会的意義概念とその組織	国立民族学博物館 教授 森田 恒之	OSIC
8/25	水	14:00-16:00	O	〈移動〉文化財建造物の維持管理	蔵島神社 社殿	広島
8/26	木	9:30-12:30	O	多国籍言語を使用した博物館	広島平和記念資料館	広島
8/27	金	10:00-16:00	LO	博物館での遺跡の活用	広島県立歴史博物館	福山
8/28	土	10:00-14:30	O	テーマ博物館	日本はきもの博物館・日本郷土玩具博物館	松永
				〈移動〉松永→OSIC		
8/29	日					
8/30	月	10:00-16:00	L	博物館と観光	国立民族学博物館 教授 石森 秀三	OSIC
8/31	火	10:00-16:00	L	日本の博物館制度	国立民族学博物館 教授 大塚和雅	OSIC
9/1	水			代休		
9/2	木	13:30-16:30	L	日本の博物館	(財)日本博物館協会 総務部長 新妻洋子	OSIC
9/3	金	10:00-16:00	L	美術館の運営と企画	大阪市立美術館 館長 森 豊	OSIC
9/4	土					
9/5	日					
9/6	月	10:00-12:00	D	インタビュー	運営委員	OSIC
		13:30-17:00	L	博物館と文化財	文化遺産保護協力事務所 研修事業部長 工藤 善通	OSIC
9/7	火	13:30-16:00	LO	自然史博物館の運営	大阪市立自然史博物館 学芸課長 岡本 素治	大阪市
		10:00-12:00	LO	弱者対策	兵庫県立近代美術館 館長補佐 中島 徳博	
9/8	水	14:00-16:00	O	企業博物館	(財)竹中大工道具館 主席研究員 沖本 弘	神戸
9/9	木	10:00-16:00	L	博物館における文化の表象	国立民族学博物館 助教授 吉田 泰司	OSIC
9/10	金	11:00-16:00	O	民族学博物館の見学	国立民族学博物館	民博
9/11	土					
9/12	日					
9/13	月	10:00-16:00	L	教育普及活動	目黒区美術館 学芸員 降旗 千賀子	OSIC
9/14	火	10:00-16:00	LP	景観模型	(有)景観模型工房 代表取締役 盛口 正晴	OSIC
9/15	水					
9/16	木	10:00-16:00	L	生物劣化対策	イカリ消毒株式会社 部長 川越 和四	OSIC
9/17	金	10:00-16:00	LO	テーマ展示のあり方1	立命館大学 館長 安斎 育郎	京都市
					国際平和ミュージアム 学芸員 山辺 昌彦	
9/18	土					
9/19	日					
9/20	月	10:00-16:00	L	博物館とフィールドワーク	国立民族学博物館 教授 田村 克己	OSIC
9/21	火	10:00-16:00	L	博物館と建築	横浜国立大学 助教授 大塚 一興	OSIC
9/22	水	10:00-12:00	L	資料収集の方法・登録システム	大阪市立博物館 館長 相澤 一弘	大阪市
		14:00-16:00	O	教育普及活動	キッズプラザ大阪 副館長 山田 隆三	
		10:00-12:00	L	地方博物館における企画展のあり方	吹田市立博物館 主任 藤原 学	
9/23	木	13:00-16:00	O	地方の中規模博物館1	"	
9/24	金			代休(公開フォーラム打合せ)		OSIC
9/25	土	13:30-17:00	LD	公開フォーラム	大阪国際交流センター 基調講演 網干 善教	大阪市
9/26	日					
9/27	月			代休		
9/28	火	10:00-16:00	L	博物館の防災	アジア防災センター 副センター長 小川 雄二郎	OSIC
9/29	水	10:00-16:00	L	展示デザインの実際	(株)乃村工芸社 代表取締役 嶋 泰平	OSIC
9/30	木	10:00-16:00	L	"	"	OSIC
10/1	金	11:00-16:00	LO	"	琵琶湖博物館	滋賀県
10/2	土					

月日	曜日	時間	形態	研修項目	講師/見学先	場所
10/3	日			<移動>OSIC→奈良		
10/4	月	13:30-16:00	O	公開を目的とした文化財収蔵施設	興福寺国宝館、東大寺、春日大社宝物館	奈良市
10/5	火	10:00-16:00	LO	史跡博物館と埋蔵文化財の保存	奈良国立文化財研究所 埋蔵文化財センター	西大寺
10/6	水	13:30-16:00	O	博物館資料の保存と修復	(財)元興寺文化財研究所 保存科学センター	生駒市
10/7	木	10:00-16:00	LO	考古学調査と博物館	奈良県立橿原考古学 付属博物館館長 研究員 泉森 悠	橿原市
10/8	金	10:00-15:30	LO	地方の中規模博物館	奈良県立民俗博物館 学芸課長 奥野 義雄	大和郡山
				<移動>奈良→OSIC		
10/9	土					
10/10	日					
10/11	月					
10/12	火					
10/13	水					
10/22	金			[国立民族学博物館委託期間]		
10/23	土					
10/24	日					
10/25	月			[国立民族学博物館委託期間]	研修旅行	
10/31	日					
11/1	月	10:00-12:30	L	文化行政と博物館	奈良県企画部 学研都市推進室 室長 井上 恵嗣	OSIC
11/2	火	9:30-12:00	L	人権教育の場としての博物館	東京学芸大学 助教授 君塚 仁彦	OSIC
		14:00-16:00	O	テーマ展示のあり方	大阪人権博物館 教育普及課長 小島	大阪
11/3	水					
11/4	木	10:00-16:00	LP	収蔵・展示資料データベース	国立民族学博物館 教授 久保 正敏	OSIC
11/5	金	10:00-16:00	LP	"	"	"
11/6	土					
11/7	日					
11/8	月	10:00-12:00	L	複製・複製・レプリカ	(株)京都科学 営業課 仲宿 泰	京都
		13:00-16:00	P	"	" 制作課 西田 均	"
11/9	火	10:00-16:00	P	"	" 制作課 西田 均	"
11/10	水	10:00-16:00	P	"	" 制作課 伊達 由美	"
11/11	木	10:00-16:00	LO	博物館の整備	WJ株式会社 部長 鈴木 淳	大阪市美
		10:30-12:30	LO	文化・文芸活動	姫路文学館 学芸員 河野 雅子	姫路
11/12	金	14:00-16:00	LO	歴史的建造物の保存展示：姫路城	兵庫県立歴史博物館 学芸員 堀田 浩之	"
11/13	土					
11/14	日					
11/15	月			専門研修（インターン期間）	(12/21-22, 24を除く)	
12/27	月					
12/21	火	10:00-16:00	LP	資料の計測と図化	国立民族学博物館 教授 近藤 雅樹	民博
12/22	水	10:00-16:00	LP	"	"	"
12/23	木	9:30-12:00	LO	科学技術館の展示	大阪市立科学館 庶務係長 安井 季次	大阪市
12/24	金			代休		
12/25	土					
12/26	日					
12/28	火	10:00-12:00	L	ファイナルレポート作成要領		OSIC
12/29	水					
1/3	月			冬休み		
1/4	火			レポート作成日		OSIC
1/5	水	11:00-15:00	LO	史跡と博物館	大阪府立近つ飛鳥博物館 学芸員 一瀬 和夫	南河内郡
1/6	木	13:30-16:00	LO	博物館の財政・経営	産業技術記念館 副館長 飯田 隆彦	名古屋
1/7	金	10:00-15:00	LO	野外博物館	野外民族博物館(MO-M) 主任研究員 亀井 哲也	犬山
1/8	土					
1/9	日					
1/10	月					
1/11	火			レポート発表打合せ		OSIC
1/12	水	10:00-16:00	P	輸送と梱包	日本通運株式会社 第二事業所長 関西美術品支店 河南 博之	民博
1/13	木	13:30-16:00	L	日本の文化援助	外務省文化交流部 文化第一課 外務事務官 高垣 了士	OSIC
1/14	金	10:00-16:00	LO	最終レポート発表会	運営委員	OSIC
1/15	土					
1/16	日					
1/17	月	14:00-15:30		評価会・閉講式		OSIC

注) L:講義 O:見学 P:実習

平成11年度博物館技術コース専門研修日程表

No.	研修員氏名	国名	11月							12月																																			
			15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27
1	Ms. Yang Xhiao-Jun	中国	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27
2	Mr. Phouyong Sourya	タイ	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27
3	Ms. Oynbileg Sundui	モンゴル	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27
4	Mr. Bharat Raj Rawat	インド	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27
5	Mr. L. Mushokabanji	タンザニア	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27
6	Mr. E. Morales Milton	ボリビア	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27
7	Ms. Roxana B. Shintariヘル	ペルー	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27
8	Mr. Michael Kisombo	タンザニア	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27

 最良複製型器茶製の研修員
  休日
  ブランク
  民博

No.	研修監理員	所属	11月							12月																																			
			15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27
1	山崎 万寿子	大阪	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27
2	林 理恵子	大阪	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27
3	山根 花子	大阪	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27
4	高野 慶子	東京	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27
5	池田 珠英	名古屋	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27

平成11年度博物館技術コース専門研修日程表

No	研修員氏名	国名	11月							12月																																			
			15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27
1	Ms. Yang Xiang-Jun	中国	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27
2	Mr. Phouvong Sourya	タイ	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27
3	Ms. Oyumbieg Sundui	モンゴル	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27
4	Mr. Bharat Raj Rawat	インド	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27
5	Mr. L. Muehokabaraji	カンボジア	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27
6	Mr. E. Morales Milton	ベネズエラ	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27
7	Ms. Roxana B. Shintari	ペルー	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27
8	Mr. Michael Kisombo	ケニア	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27

黒線型研修習者等の研修員 □ 休日 □ フランク 民情

No	研修員氏名	所属	11月							12月																																			
			15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27
1	山高 万壽子	大阪	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27
2	林 理恵子	大阪	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27
3	山根 花子	大阪	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27
4	高野 慶子	東京	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27
5	池田 珠美	名古屋	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27

6. 国別年度別受入実績表

	H16	H17	H18	H19	H10	H11	受入 合計
	受入	受入	受入	受入	受入	受入	
アジア地域	6	4	4	3	3	4	24
タイ	1	2					3
ラオス	1	1				1	3
マレーシア	2	1					3
中国						1	1
ブータン	1		1				2
モンゴル	1					1	2
シンガポール			1		1*		2
インドネシア			1	1			2
モルディブ			1				1
カンボジア				1			1
ミャンマー				1			1
パキスタン					2		2
ネパール						1	1
アフリカ地域	1	1	3	2	1	1	9
マダガスカル	1						1
ザンビア			1			1	2
エチオピア		1					1
ガーナ			1				1
ケニア			1				1
カメルーン				1			1
セネガル				1			1
タンザニア					1		1
中南米地域	0	1	1	1	2	2	7
ペルー		1				1	2
グアテマラ				1	1		2
ボリヴィア			1			1	2
チリ					1		1
大洋州地域	1	2	1	0	1	1	6
ミクロネシア							0
ソロモン諸島	1	1					2
バプア・ニューギニア		1	1			1	3
ヴァヌアツ							0
フィジー					1*		1
中近東地域	0	0	0	2	1	0	3
シリア				1			1
サウジアラビア				1	1		2
その他					1		1
マケドニア					1		1
合計	8	8	9	8	9	8	50

*コース期間中に早期帰国

II. 調査団の概要

1. 派遣目的

- (1) 帰国研修員及び帰国研修員所属先関係者などへの面接を通して研修内容に関する定着度及び適用度について確認を行い、研修コースの評価を行うとともに、現地の博物館の現状を視察・調査することによって途上国のニーズにより適応したコースの実施に向けてのカリキュラム改善の一助とする。
- (2) 現地での公開セミナー開催を通じ当該分野における最新技術情報を広く関係者に提供する。

2. 団員構成

(1) 団長・総括

国立民族学博物館 教授 森田恒之

(2) 団員・技術指導

吹田市立博物館 主幹 藤原学

(3) 団員・研修評価

国際開発ジャーナル社 関西支社長 齋藤實

(4) 団員・協力企画

JICA大阪国際センター 業務課課長代理 小池芳一

(5) 団員・研修計画

JICA大阪国際センター 業務課職員 徳田進平

3. 調査期間

平成12年1月29日(土)～平成12年2月9日(水) (12日間)

4. 調査日程

日順	月日	曜日	訪問機関	調査事項、面会者等
1	1/29	土	移動（大阪ーバンコク）	
2	1/30	日	移動（バンコクー ヴィエンチャン）	
3	1/31	月	ラオスJICA事務所 革命博物館 情報文化省	調査日程打ち合わせ 現地視察 表敬、関係者面談
4	2/1	火	ラオスJICA事務所	帰国研修員面談
5	2/2	水	ランサンホテル 日本大使館 JICA事務所	公開セミナー実施 報告 報告
6	2/3	木	移動（ヴィエンチャンー バンコク） The National Arts Gallery タイJICA事務所	帰国研修員面談 調査日程打ち合わせ
7	2/4	金	移動（バンコクーナン） ナン国立博物館	帰国研修員面談
8	2/5	土	移動（ナンー カンペンベト） スコタイ歴史公園	現地視察
9	2/6	日	カンペンベト国立博物館 移動（カンペンベトー バンコク）	帰国研修員面談
10	2/7	月	タイ援助窓口機関 教育省	表敬 関係者面談
11	2/8	火	ロイヤルプリンセス ホテル JICA事務所	公開セミナー実施 報告
12	2/9	水	移動（バンコクー関空）	

5. 帰国研修員名簿

List of Exparticipant for Training Course on Museum Management

No.	Name and Family Name	Title/Organization
Laos		
1	Mr.Soulaphonh NAOVARATH	Expert Secretary Office of Governor's Office,Vientiane Province Tel:(856)214167
2	Mr.Khamphouy PHOMMAVONG	Deputy Director Information and Culture Division Luangprabang Provice Tel:(856)71212912 Moblie:020570082
3	Mr.Phouvong SOURYA (Now he is undergoing the training in japan)	Museologist . Division of Management of Museum, Ministry of Information and Culture Tel:(856)212423,212895 P.O.Box:122 Vientiane Lao PDR
Thailand		
1	Mr.Jarunee Incherdchai	Curator The National Arts Gallery Thanon Chao Fah Bangkok 10200 Tel:282-0637 Fax:282-2640
2	Ms.Patcharin Sukpramool	Head Kampaengpech National Museum Kampaengpech Province T/F:055-711-570
3	Mr.Wised Phetpradab	Head Nan National Museum Pha Kong Rd.Tumbon Naivieng, Amphoe Muang Nan Province Tel:054-710-561 Fax:054-772-777

6. 主要面会者

ラオス

1 / 3 1

JICA事務所 宮田伸昭 次長
正木幹生 企画調査員
Ms.Alounxay ORABOUNE Program Officer

革命博物館 Ms.Chanphone SAYARATH 館長

情報文化省 Mr.Bounleuane BOUPHA Deputy Chief of Cabinet
Mr.Thongsa SAYAVONGKHAMDY Director general, Department of Museums
and Archeology

2 / 1

JICA事務所 Mr.Soulaphonh NAOVARATH 帰国研修員
Mr.Phouvong SOURYA 帰国研修員
関千春 JOCV隊員(写真) ルアンプラヴァン国立博物館

2 / 2

日本大使館 長野誠司 一等書記官

JICA事務所 青木眞 所長

タイ

2 / 3

The National Gallery Ms.Kanittha Wongpanit Director
Mrs.Jarunee Incherdchai 帰国研修員

JICA事務所 岩口健二 所長
坂田英樹 所員
Ms.Sumontha Saetaiew Programme Officer

2 / 4

Nan National Museum Mr.Wised Phetpradab 帰国研修員

2 / 5

Sukuothai Historical Park Ms.Nawarat Janchay Park Staff

2 / 6

Kampaengpech Historical Park Mr.Tharapong Srisuchat Director of the 5th Regional office of
Archaeology and National Museums, Sukuothai
Mrs.Amara Srisuchat Director of Kampaengpech Historical Park

Kampaengpech National Museum Ms.Patcharin Sukpramool 帰国研修員

2 / 7

タイ援助窓口機関

- | | |
|----------------------------|---|
| 1.Mr.Chittimas Kongpolprom | Acting Chief,Fellowship Programme Sub-division
External Cooperation Division I |
| 2.Ms.Kasama Roopkhajorn | External Cooperation Officer 6
Fellowship Programme Sub-division(Fellowship Staff) |
| 3.Ms.Orawan Amomchewin | External Cooperation Officer 5
Training Analysis Sub-Division |
| 4.Ms.Bunnee Erpantaveepong | External Cooperation Officer 4
Planning Division(M&EStaff) |
| 5.Ms.Chantana Muanphao | External Cooperation Officer 3
Fellowship Programme Sub-division(Fellowship Staff) |

教育省

- | | |
|-------------------------------|---|
| 1.Captain Arvuth Ngoenchuklin | Director-General |
| 2.Mr.Arak Sunghitakul | Deputy Director-General |
| 3.Mr.Prachote Sangkhanukit | Director,Office of Archaeology and National
Museum |
| 4.Dr.Somsuda Leeyavanija | Secretary |
| 5.Mrs.Natfapatra Chantawit | Curator Level 8 |
| 6.Mr.Somchai Na Nakhonpanom | Director,National Museum Bangkok |
| 7.Mrs.Somluk Charoenpot | Director,National Museum Kanjanapisek |
| 8.Mrs.Jarunee Incherdchai | Curator |
| 9.Ms.Jaree Limlamai | Chief,External Relations Sub-Division |
| 10.Ms.Nithivadee Homyarn | External Relations Officer |

Ⅲ.各訪問先における具体的状況

1. ラオス

(1) 帰国研修員面談結果

面談者：Mr.Soulaphonh NAOVARATH（1994年度研修員）

当時の職：Vientiane県遺跡・文化財担当技師

現在の職：同県史跡・文化財局次長

研修期間中は本人の英語能力にやや不足があり、フランス語による補講を行なっても十分な理解を欠くと見られる局面が時々あったが、今回の調査はそれがまったくの杞憂であったことを証明した。同県は同氏を担当責任者として文化センター建設計画を進めている。博物館、劇場（音楽会場）、伝統芸能の研修会場など多目的機能を有する施設である。過去数年の同国の経済危機の結果、用地取得は済んでいるものの建設着工が大幅に遅れている。しかしその遅れのために計画の再検討がかなり入念に行える結果となっている。計画案は優れたものであり、同氏が研修期間中に副次的に見学した諸施設で得た知見が広範囲で活用されている。期間中に研修生からもたらされる情報だけでも、一部の国にあっては、斯様な複合文化施設要員を派遣してくる場合も十分に想定されるので、今後のプログラム編成とくにインターン委嘱機関の選定には入念な面接に基づく配慮がいる。

面談予定者：Mr.Khamphouy PHOMMAVONG(1995年度研修員)

当時の職：ルアンプラバン国立王宮博物館館長

現在の職：ルアンプラバン県文化局次長（世界遺産条約会議国内委員長兼任）

面談予定者が本務の都合で任地(首都より約300km)を離れることができなかったため、本項は他の関係者から事情を聴取した結果である。同氏は帰国2年目で現職に移ったが、その前後を通じわが国の国立民族学博物館ほかの博物館と緊密な関係を維持し、王宮博物館の整備に努めている。この間、日本の関係と共同で作りあげた資料登録システムを、軌道に乗せたのに始まり、旧王宮時代から蓄してきた膨大な資料類の整理、目録作成を着実に進めるとともに、わが国に対し必要な資材の文化無償要請(申請済)、資料の写真撮影ならびに実測・整備を担当する海外青年協力隊員の派遣要請などを積極的に推進している。JOCV隊員については1名(写真)はすでに着任、他の1名も2000年度派遣が決定(研修完了)している。わが国が有するさまざまな援助枠を有機的に連携活用して先方の発展整備に資することは大変好ましいことであり、同氏の場合は研修参加が有用な端緒を作ったといえ

る。同氏の職場は地理的に他地域から孤立しているが、近隣の研修員と密な連絡をとりあっており、将来もネットワーク形成のキーパーソンとなるだろう。

面談者：Mr.Phouvong SOURYA（1999年度研修員）

当時の職：情報文化省博物館・考古局専門職事務官

現在の職：同上

同氏は帰国後、まだ10日を経っていないので特別の事項はない。しかし本省上層部は本年初めに旧国立革命博物館から改組した国立歴史博物館学芸員に2月1日付けで発令した。あわせて、旧博物館以来の館長（一般行政職）を更迭し、新館長にラオス国立大学歴史学教授を任命した。同館の専門職員は当分の間、館長（歴史学）のほか、歴史、文学・哲学、博物館学(SOURYA氏)の計4名で新博物館の体制整備、拡充を行なっていくことになる。同氏との面談は発令内示前であり、当方としては事前に入手した人事情報を秘匿したが、当人は任命に対する期待と抱負とともに、将来構想を練り始めている。同氏は現在のラオスにあって博物館全体にわたる基礎知識を有する貴重な人材であり、非公式情報では、ラオス国立大学が近い将来同氏を博物館学担当非常勤講師に委嘱して人材育成をしたい意向があるとのことである。同氏はラオスの博物館発展に実務面で有力人物になるだろう。

参考とすべき関係者との面談結果

面談者：Mr.Thongsa SAYAVONGKHAMDY

現在の職：ラオス情報文化省博物館・考古局長

同国博物館専門職員の人材養成計画にたいしこれまでJICAがとってきた支援に多大な感謝の意を示すとともに、今後の協力継続を養成した。養成を必要とする人材候補者はまだ数名が待機状態とのことである。その他、旧国立革命博物館の廃止と新国立歴史博物館への改組に伴う諸問題につき意見交換した。とくに新歴史博物館は建物・設備の老朽化が進んでおり、当局としては建物の新築移転を構想している。すでに用地は取得してあるが、政府はタイ・パーツの暴落に連動した極端な財政困難に直面しているため、計画は凍結されている。建設の実現が多少遅れても、その間に必要な人材育成と、他に引けをとらない博物館構想をまとめあげたいので、その面での協力も求めたいとの意向が示された。同氏の私案として、「タイで日タイ協力によるセミナーが開催してもらえると、地理、言語、人材派遣の経費と時間などすべての面で利するところが大きい」との意向が寄せられた。発展途上国の諸事情を考えると、実現にはさまざまな困難が伴うことは明白であるが、一理ある提案と思われる。

(2) 帰国研修員への質問票集計結果 (ラオス)

今回調査団の派遣にあたり調査活動の一助とするため、帰国研修員に対しアンケートを行い帰国研修員6名全員から回答を得られた。以下に集計結果を各国別に記す。

a. 研修成果適用度

All	Most	Some	A little	None
0	1	2	0	0

個別回答

- ・ ヴィエンチャン県の文化（特に博物館）に関するカウンセラー業務を行っている。
(Mr.Soulaphonh)
- ・ 国の文化財の保存に役立っている。(Mr.Khamphony)

b. 研修員自身に対する有益性

Yes	No
3	0

その理由 (複数回答)

昇進	責任	昇級	業務内容	専門性	国際理解	その他
1	3	0	2	2	0	0

c. 研修員所属先に対する有益性

Yes	No
3	0

個別回答

- ・ 現在ラオスの全博物館の運営プログラムを作成する仕事をしており、研修で学んだ知識を活用できる。(Mr.Phouvong)
- ・ 情報文化省、県知事に対して博物館に関しアドバイスをすることができる。
(Mr.Soulaphonh)
- ・ 国の文化財の保存に役立っている。(Mr.Khamphony)

d. 現在の職務との関わり

- ・ 博物館の展示・文書化に関するコンピューターの活用、セキュリティシステム

- ・ 薰蒸・照明・模型作成・収集(Mr.Phouvong)
- ・ 考古学 (Mr.Soulaphonh)

e.現職における問題点

指導者の欠如	2
政府支援の不足	1
資金不足	3
技術的な文献の不足	1
外国からの専門家の不足	1
適切な交通機関の不足	1
長期的展望の欠如	0
外貨不足	2
経済的制約	2
知識の流出	0
管理能力の不足	0
研修期間の欠如	0
外国からの干渉	0
政治的制約	0

個別回答

- ・ 博物館運営を行う上で必要なコンピューター、スキャナー、プリンター、ビデオカメラといったものを買うための予算がない。(Mr.Phouvong)
- ・ ラオスの通貨キップの通貨価値が下がったあと、ヴィエンチャン県の文化センター建設が中断された。(Mr.Soulaphonh)
- ・ 世界遺産の保存は近隣住民の問題といった様々な問題と関連しており非常に複雑で難しい問題である。(Mr.Khamphony)

f.コース改善に関するアドバイス

- ・ このコースは11ヶ月以上に延長されるべきである。また理論、視察以上に実習を重視すべきである。(Mr.Phouvong)

2. タイ（各訪問先における具体的状況）

（1）援助窓口機関の状況

Department of Technical and Economic Cooperation(DTEC)は大統領府の管轄下にある海外協力のコーディネーター業務を行う機関であり、およそ300人の職員を擁する。現在は各国からの援助の窓口業務のみならず、近隣諸国、アフリカへの援助も行っている。

DTECでは研修員の選考を以下の流れで行う。（詳細は別添資料：Selection of participants参照）

1. JICAから送られてきたG.Iの内容を検討し、適当と思われる機関にG.Iを送る。
2. 割り当てられた機関では候補者を選考し、DTECに推薦する。
3. DTECにて候補者の経歴による事前審査、英語テスト（50%以上が合格ライン）を行い候補者を決定・通知する。

なおDTECにてG.Iを受け取ってから候補者を選定しJICAにA2,A3を送付するまでに12～14週間を要するとのことである。また研修員は帰国後DTECにレポート提出することが義務づけられており、このレポートを元に研修員を評価するとのことである。

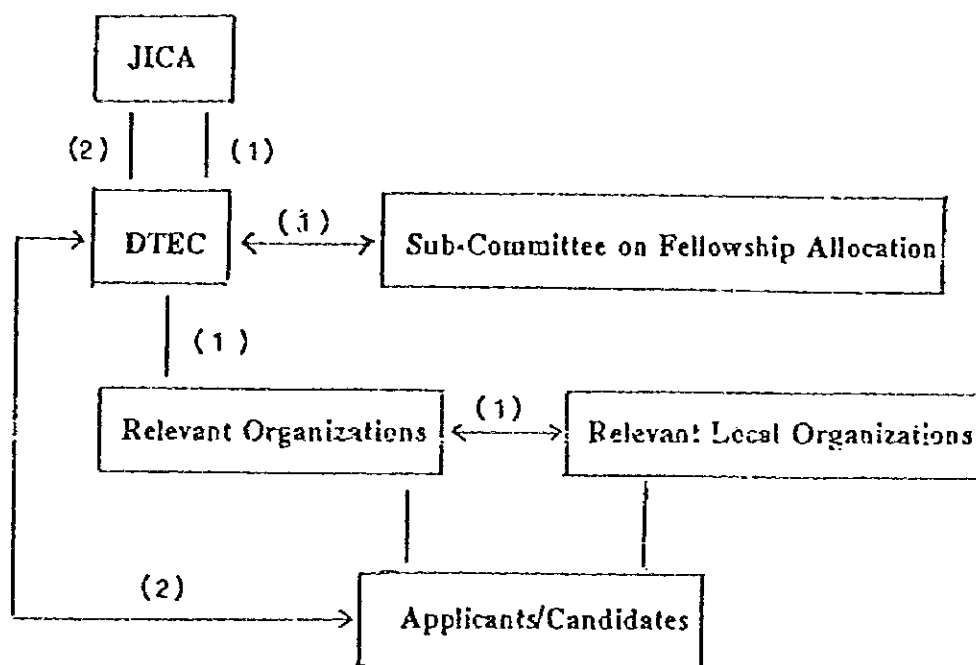
現在タイからは年間およそ250名の研修員を送り出しており、主に農業・環境分野のコースが多い。文化に関する本コースはタイの政策上からしても非常に重要なコースであり今後情報が来れば応募をしたいとのことであった。

なお今回の面談時に入手したタイにおける研修員選考のフローチャートをここに添付する。

Selection of participants

1. About the flow of General Information (GI) and nomination form.

(1) = Flow of GI (2) = Flow of nomination form



3. About DTEC's English Examination:

- 3.1. The English examination is usually held once a year for each course in a timely fashion subject to the time frame required for submission of application.
- 3.2. Pass mark is 50%
- 3.3. One or Two candidates will be preferably selected.
- 3.4. If more than one applicants can pass the exam. Their scores will be ordered; and one or two of them with highest score , from different agencies, will be selected accordingly.

4. Step of the selection process.

(Please see the step and detailed explanation in the attachment)

Fellowship Processes and Time Required

Activities	Time Required
1. To analyze general information of offered course and make recommendation to the Sub-Committee for Fellowship Allocation in order to allocate it to agencies concerned (The meeting is usually held every two weeks)	2-4 weeks
2. To inform the allocated agencies of the offered fellowship together with sending G.I. (Dates of application and English examination are specified in DTEC's letter)	1 week
3. Agencies concerned decide of nominees inside the organizations to which they belong and nominate to DTEC	4 weeks
4. Pre-screening of applicants by DTEC (This step is done before English examination when applicants hand in the designed bio-data forms)	1 week
5. Applicants sit for DTEC's English examination and wait for the result	1 week
6. Selecting two applicants and checking their qualification according to the RIG's regulations	1 week
7. To inform of DTEC's selection to selected applicants or their agencies and distribute the A2A3 forms with G.I. (This step can be done at the same period of step 6)	-
8. Applicants prepare application forms (A2A3) and return them to DTEC (Country report maybe submitted later)	1 week
9. To nominate candidate(s) to JICA together with application forms	1 week
Total time required	12-14 weeks

Criteria for Selection of Applicant

1. The description of the course specified in G.I., especially considering on :
 - Qualification of applicants
 - Objectives
 - Curriculum

2. The RTG's regulations for application :
 - At least one year of work experience at present agency
 - Past fellowship award(s)
 - Not being nominated or apply for other course
 - etc.

3. Applicants' biographical data, to check their qualifications emphasizing on :
 - Present responsibilities related to the course content
 - Work experiences
 - Future work plan or intention to apply/utilize the knowledge gained from the course

4. English language proficiency :
 - 50 % pass mark of DTEC English examination

(2) 帰国研修員面談結果 (タイ)

面談者：Ms.Jarunee Incherdchai (1994年度研修員)

現在の職：国立近代美術館学芸課長

当時の職：バンコック国立博物館教育担当係長相当職

タイの国立博物館は中央集権型であり、日本の都道府県立に相当する施設を国が管理し、専門職を含む幹部および幹部候補職の人事はすべて中央で管理している。これら職の採用条件は大学卒業者である。新規採用者は、所定の研修期間終了後、原則として地方の国立博物館職員を経験したのち、首都圏の博物館施設に勤務する。その後、ふたたび、複数の地方博物館の管理職を経て首都圏博物館もしくは政府芸術局の管理職に昇進するのが一般的なコースである。インチェルチャイ研修員は、タイ教育省芸術局採用後、約3年の地方博物館勤務を含む9年弱の博物館専門職員の経験をもって、バンコック国立博物館教育担当職員の身分で研修に参加した。帰国後、同職に復帰したのち、1998年から現職に昇進した。現職は館長、事務局長に次ぐ地位にあるが、館長は幹部職のローテーションに基づく非専門家(公文書館専門職出身者)であり、実質的には面談者が美術館の専門的事項をすべて統括する立場にある。上級係長級の教育担当職は学芸課長級に昇進する前に経験すべき複数職種のひとつである。この情報はわが国で今回初めて知り得たものであるが、今後タイからの研修員受け入れに当たっては十分留意すべき点である。すなわち、上級の教育担当職は近い将来より広範な範囲をカバーすべき管理職要員候補と見ておくべきだろう。わが国では、博物館専門職員の間にあってもどちらかといえば、より専門性を特化する傾向が生まれつつあるが、彼国にあってはむしろ総合職としての視野を求めている傾向が認められる。

Mr.Wised Phetpradab (1995年度研修員)

現在の職：Nan国立博物館館長

当時の職：Ratchaburi国立博物館館長

Ms.Patcharin Surkpramool (1995年度研修員)

当時の職:バンコック国立博物館学芸員

現在の職:Kahnphaenphed国立博物館館長

前者は北部タイ、後者は中北部タイの中核博物館の館長職にある。両名ともに帰国後、2回の移動を経験している。現在、タイでは幹部級国家公務員は原則として2年で移動す

ることになっている。博物館専門職の層が薄く、幹部職員は専門職と行政管理のすべてを兼務しなければならない。ちなみに両研修員の部下はそれぞれ1名の事務補佐を除いて技能職である。各館の事業計画は大局においては中央で作成され、地方施設はその管理運営を行うのが主たる業務であるが、小規模のイベント等は予算範囲内の裁量で実施できる。展示の変更等は計画を一旦中央にあげ、あらためて予算を得てから実施することになるので、計画を立案した館長は実施とほぼ同時に移動しなければならない矛盾を生じている。にもかかわらず、Wisod氏はすでに2つの館で企画案を出し、ひとつが実施中であるといい、発想は滞日中の奈良県立民俗博物館での実習に得たとのことである。またPacharin氏は、現職にあつて地元の師範学校生徒の協力を得て昨年来、いくつかの教育事業を企画している。学生の活用は日本で知見した学生の学芸員実習を参考にしているとのことであるが、その手法は研修中に接触できたはずのものよりはるかに充実している。高等教育が整備し、優秀な人材を有している諸国にあつては、発想のヒントとなる知見を得ること、十分な実務経験を有する専門家と数多く接触し、意見を交換する研修方法が非常に有効であると思われる。

タイ教育省芸術局における懇談会

出席者：（タイ側）*****（芸術局長）、*****（同次長）

研修員候補の国内選考基準について、「当方の提示条件のうちとくに経験年数、英語能力を重視し、独自の国内選考を実施しており、1次選考（基準通過）の合格率は50%」との説明があつた。また、研修員が広範囲に知見を広めて帰国し、他の幹部級（候補を含む）職員との交流の中で有用な情報提供者となっていることに謝意が示された。あわせて、今後とも継続受け入れを希望するむね発言があり、当方からここ4年間受け入れなしとなつた事情とともに、2001年度以降の可能性は十分あることを説明して了解を得た。懇談の中で、現地研修会の開催希望が出された。タイでは大学等で博物館学を指導できる教員が少なく、開講大学もタマサート大ほか1、2を教えるのみで人材候補の層が極端に薄いのが実情である。従つて、対象者は若手の博物館職員および大学生を含む専門職候補者ならびに将来の養成担当者としていたいという。ラオスの意向を漏らしたところ、カンボディアからも類似意向がもたらされたいとのこと。タイ・ラオス・カンボディア3国は言語を含む文化的背景に類似性が高く、合同研修の意義・効果は十分に期待できる。人材、経験の上で日本に対する期待が絶大である。タイ側は会場と事務局を用意し、日本からは講師、教材とする機材（一部）を負担し、参加費を含むその他経費は各国が自国の責任で負担するというのがタイ側の考える構想の骨子である。話し合いの中で、各国の帰国研修員を講師陣に起用してはどうかとの提案もあり、「博物館技術コース」の今後の展開、活用法としてもぜひ実現したいプランである。日本側は機構の枠をこえた多角的な対応を考えるべき

であろう。この件に関して、帰国後いくつかの組織と接触をもったところ、国際交流基金アジアセンターが関心を示し、計画次第で平成12年度の実施も可能との情報を得ている。

フォローアップ調査外での研修生面談

面談者：Khamis (1994年度研修生)

当時の職：マレーシア・マラッカ博物館公社・州立歴史博物館学芸課長

現在の職：マラッカ州博物館公社・州立歴史民族博物館長

この調査に引き続き、筆者は別件でマレーシアに赴き、第1回研修生のカミス氏と面談する機会を得た。史跡に恵まれ、歴史観光に依存するところの大きいマラッカ市は、史跡記念物の維持管理を連邦政府(以下、国と記す)、動産文化財ならびに博物館の設置運営を州政府が所管することを原則としている。博物館公社は後者の事業を目的に設置された特殊法人である。国と州政府の職員間には緊密な連絡があり、人事、財政を除く多くの事業で実質的な意見交換や相互助言が行われている。地方では国側の常駐職員が少なく、州から国への協力が大である。Khamis氏が日本での知見をもとに国や州政府に与えた助言の結果をいくつか実見したがいずれも適切で、新鮮さをもって受容されている。

タイ、ラオスでの調査でも同様の意見がしばしば出たが、Khamis氏からも研修期間中に得た国際的な交友関係が次第に意味をもちはじめていることへの感謝がよせられた。同じ専門職としての関係は単なる学生関係より密であり、また短時日の共同生活では得られないものがある。研修コースの同窓生という新たな人間関係が着実に芽生えつつある。こうした関係が今後の複雑な国際関係の中で大きく機能することを期待したい。

なお、Khamis氏の言によると、研修員等の募集案内はほとんど連邦政府内で優先的に配布され、応募者(または適格者)がない場合に限り州政府に案内が回ってくるので、書類作成の時間がほとんどない、という。これが事実とすれば、地方分権が進んでいる国ほど中央と地方の機会格差があることになる。今後の応募用紙配布方法については、相手国の内政干渉にならない範囲で機会均等を計れるような配慮をすべきである。

(3) 帰国研修員への質問票集計結果 (タイ)

a. 研修成果適用度

All	Most	Some	A little	None
1	1	1	0	0

個別回答

- ・ 収集・保存・展示・教育という主な仕事全てに役立っている。本美術館では現代美術の展覧会を年30～35行っており、特に展示技術は役立っている。(Mrs.Jarunee)
- ・ 研修終了後、経済危機のため政府は全国の国立博物館の展示改善のプロジェクトを延期した。このため新たに学んだコンセプトを活かす機会が少ない。(Mr.Wised)
- ・ 展示デザイン・改善計画の作成・博物館活動の促進といった博物館システム、運営に関する知識が現在の仕事に生かせる。(Ms.Patchrin)

b. 研修員自身に対する有益性

Yes	No
3	0

その理由 (複数回答)

昇進	責任	昇級	業務内容	専門性	国際理解	その他
2	3	1	3	2	2	0

c. 研修員所属先に対する有益性

Yes	No
3	0

個別回答

- ・ 人材育成、共通課題を持つ国との関係の拡大、博物館運営改善のために経験・知識・アイデアを交換できる。(Mrs.Jarunee)
- ・ 博物館運営に関する経験・知識を増やせる。(Mr.Wised)
- ・ 博物館運営に関する高度な技術と経験を知り、自分の博物館の改善に応用できる。(Ms.Patchrin)

d.現在の職務との関わり

- ・収集(Mrs.Jarunee)
- ・展示、保管、収集物調査、組織運営(Mr.Wised)
- ・講義、視察、セミナー、専門研修(Ms.Patchrin)

e.現職における問題点

指導者の欠如	3
政府支援の不足	3
資金不足	3
技術的な文献の不足	2
外国からの専門家の不足	2
適切な交通機関の不足	1
長期的展望の欠如	2
外貨不足	1
経済的制約	3
知識の流出	3
管理能力の不足	3
研修機関の欠如	3
外国からの干渉	0
政治的制約	2

個別回答

- ・もっとも大きな問題は適切な人材配置が行われていないということである。
(Mrs.Jarunee)
- ・博物館の建物が古く、設備が不足している。人事異動が不定期である。業務の多くは中央が指導権を握っており、計画に一貫性がない。(Ms.Patchrin)

f.コース改善に関するアドバイス

- ・コース2～3年後に今回のようなフォローアップ、セミナーを行う。(Mrs.Jarunee)
- ・展示概念に関する講義、実習を増やす。(Mr.Wised)
- ・3ヶ月間先進国の博物館で講義と視察を行い、3ヶ月間発展途上国の博物館で実習を行う。(Ms.Patchrin)

IV. 公開セミナー実施内容

(1) セミナープログラム

21世紀の博物館像

- ・開会の挨拶
- ・「日本の博物館の現状」 吹田市立博物館主幹 藤原学
- ・休憩
- ・「21世紀の博物館とその役割」 国立民族学博物館教授 森田恒之
- ・閉会の挨拶

(2) 実施状況

1. ラオス

日時 : 2000年2月2日、9:30~13:00

場所 : ヴィンエンチャン、ランサンホテル

参加者数: 37名

2. タイ

日時 : 2000年2月8日、10:00~12:45

場所 : バンコク、ロイヤルプリンセス、ランルーアンホテル

参加者数: 38名

*なお本講義では事前に現地語講義資料を配付し、ラオスー日本語、タイー日本語の通訳を用いて講演を行った。(別添講義資料参照)

(3) 参加者との質疑応答内容

1. ラオス

時間の制約上質疑応答の時間はとらなかった。

2. タイ

藤原団員との質疑応答

Q講演においてコンピュータの活用について述べられていたが、コンピュータをうまく利用する展示技術について少し詳しく説明いただきたい。

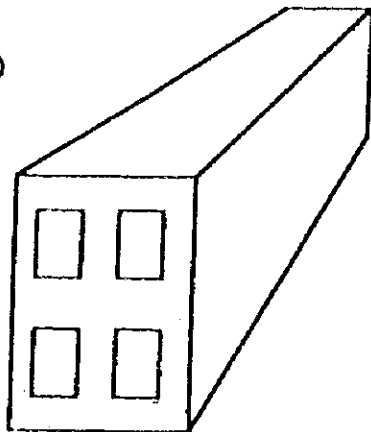
A.私の博物館ではコンピュータは資料の整理・検索に主に活用し、展示にはあまり使っていない。

森田団長との質疑応答

Q.今回の講演で博物館に来る人がよりよく展示を理解するためには博物館の文法が必要であることを痛感したが、日本ではどのような博物館の文法があるのか、またできつつあるのか？

A. 展示の原理を構成する視覚言語の文法は、私の知る限り、日本はおろか世界中のどこにもまだ存在しない。話し言葉、書き言葉の世界では、私たちはそれぞれ日本語、タイ語といった異なる言語を使って生活している。単語も文法も異なるから一般的には通訳を使わないと十分な理解ができない。しかし、「視覚語」には別の体系がある。たとえば、図のような形を見てビルだと理解する。一端の天井が他方に対して極端に短いこのようなビルは現実にはどこにも存在しない。触覚で形態を認識する視覚障害者の人たちがこのようなかたちをビルと理解することはとても困難だ。遠近法はいわば「視覚健常者語」文法の一部であるといえる。その意味では今日お集まりの方々は共通言語を使っているといえる。視覚認識に文法があること自体、一般にあまりよく意識されていない。展示という手法が視覚に依存する以上は、経験則をもとに私たちが文法を組み立てるべきだろう。どなたか一緒にやってみませんか？

(参考図)



(4) セミナー成果及び実施状況

本セミナーでは上述プログラムの通り「21世紀の博物館」というセミナータイトルのもと森田団長、藤原団員が講義を行った。藤原団員は「日本の博物館の現状」というタイトルで130年に及ぶ日本の近代博物館の発達史をふまえて、日本の現代の博物館の実状を紹介した。また同氏の所属する吹田市立博物館の運用例をもとにして、現代の博物館の機能と役割を述べた。講演の結論では、あまりにも展示設備過多に終始する日本の博物館の現状に対する反省から、博物館展示はもっと入館者と資料が冷静に対話できるものでなければならないこと、博物館の持つ地域性を十分に考慮して、将来の地域の博物館の役割を強調した。森田団長は「21世紀の博物館とその役割」と題し、21世紀の博物館に向けての2つの視点を提示した。団長は聴講者自身の生活の変化を尋ねながら、社会の高度機械化の結果人々の生活方法が変容したことを示した。その変化の結果、人類が長い間蓄積してきた生活の知恵が喪失の危機にあり、その知恵を次世代に伝えていくための装置として博物館の重要性を訴えた。またグローバル化した現代、人々が世界中を行き交うようになるるとそれぞれの土地についてよりよく知る必要があり、その際にその土地の言葉を知らない者にも見るだけで分かる博物館の特性について深く考えていく必要性を提示した。両講演は上述のように日本の博物館の現状の把握から次世紀に向けて博物館の役割を訴えていく内容であったが、地域の博物館の果たす役割を重要視しており、このことは国立博物館を地方に委譲していくことを模索しているタイにとって非常にタイムリーな内容であったといえる。

本セミナーはラオスに於いて博物館に関する最初のセミナーであり、ラオスの担当者にとって高度な内容も含まれていたものの、新鮮な情報にふれることができたということで非常に好評であった。また博物館関係者が30名以上も一堂に会することは初めてとのことで、その点においてもラオスの博物館の今後を考えていく上で関係者を勇気づけるセミナーであったのではないかと思われる。

タイにおいてはバンコクにある考古博物館局を筆頭に全国の22の博物館から40名近くの出席があり、各講演のあとには活発な質疑応答も行われ本セミナーに対するタイ関係者の関心の高さが感じられた。また講演の最後にはタイ側代表者より本セミナーを契機に日本・タイ間の交流のみならずタイを代表として東南アジア地域と日本の博物館分野における交流・協力を希望する強い意見が述べられた。このことからこの分野における協力がタイ、そして東南アジアにとって非常にニーズが高いことが伺われるセミナーであった。



Dr Thongsasayavongkhamdy

Museum in the 21st Century

"MUSEUMS play an important role in the preservation of the culture and tradition of a nation, and are vital sources of knowledge for the younger generation. People can access the history of a country by entering a museum," Museum and Archeology Department Director Dr Thongsasayavongkhamdy said at the opening ceremony of a seminar on "The Museum of the 21st Century".

The seminar was conducted by a Japan International Cooperation Agency (JICA) Museum Management team, in Laos to evaluate three Lao graduates from a Japanese museum management course.

"This seminar is evidence of the Laos-Japan relationship in the museum field. In the past Laos and Japan have exchanged experience with each other; Laos has sent staff to train in Japan, and Japanese experts have come to Laos," he said.

Mr Fujiwara presented an overview of the historical and current situations of Japanese museums,

emphasizing the important role of museums in preserving culture and tradition.

The team leader, Professor Morita, spoke on the wisdom accumulated by humans over the past 2,000 years, and the threats posed to civilization by mechanization and globalization. Prof. Morita stated that museums are a critical factor in conserving wisdom in the 21st century and beyond.

Attending the seminar were officials from the Foreign Ministry's Museum and Archeology Department, the Information and Culture Ministry, the National Museum, and other officials concerned.

V. 文化分野の技術協力「博物館技術コース」 その評価と提言

(株) 国際開発ジャーナル社
関西支社長 齋藤 實

はじめに

それを評価の仕事と呼ぶかどうかは別にして仕事柄、技術協力の現場を見に行く機会は少なくない。この2～30年間、一年に何回となく行ってきた。その殆どがモノづくり関連の産業分野の技術協力現場だった。

ところが今回、「博物館技術コース」のフォローアップ調査という、およそモノづくりとは無縁の技術協力現場を見た。当初は文化と産業という分野の違いはあっても、技術協力に変わりはない。同じ手法でなんとかなるだろう。気軽にそう考えて取り組みだしたその現場で、はたと考え込んだ。これまでの手法ではどうもうまくいかないのに気付いたからである。

気付いたのはそれだけではない。技術協力における途上国のニーズが多角化、多様化している。これまでの産業分野とは別に新たな分野で、技術協力が求められだしている。「博物館技術コース」もその一つだったのに気付いたのである。

分野の多角化と多様化により評価はもちろん移転の方法もこれまでとは違ったものが必要になってきている。これからの時代に求められる技術協力とは何か。「博物館技術コース」の評価と提言を交えて考えてみたい。

新しいタイプの技術協力

技術協力における評価をめぐる問題は、古くて常に新しいテーマである。しかし、それを評価するときの視点は、これまで大きく次の三つに集約されていた。第一は移転した技術のレベルが現地の実情に合っていたかどうか、技術の高性についてである。第二はどのように移転したか、移転の方法についてである。そして第三が移転した技術が現地で役立っているか、効果についてである。

この三つの視点から評価を行うと、産業分野の技術に関する限りかなり明確に把握ができた。そのことはこれまでの現地調査で多く経験してきた。たとえば移転した技術が適正であったかどうかは、その分野の専門家の協力を得ながら調査すると、比較的容易に評価できたし、移転の方法についてもほぼ同様だった。効果についても経済指標を使うなどしてこれも容易だったのである。

ところが文化分野の「博物館技術コース」ではそうはいかない。なぜか。

理由は簡単で、博物館技術には、農業や工業などのそのように、普遍性がない。農業や工業の技術なら、技術レベルさえ適切であればそのままどこへでも移転ができる。ところが「博物館技術」はあくまでも個別でローカルな技術（森田恒之・国立民族学博物館教授）なのである。

要するに博物館技術というのは、その国はもとよりその博物館だけでしか通用しない。少なくともそのまま他の国や他の博物館に移転しても役に立たないというのである。それではそれは学ぶに値しないかということそうではない。その技術を元にとりかかるとか、ヒントにしてそれぞれが自分で自国の自分の博物館に適した新しい技術につくり変えて移転する。それが博物館技術での技術協力だということである。

「博物館技術コース」での研修も、技術の高い国の先生が低い国の研修員に一方的に教える産業分野のそれとは根本的に違う。「自分の国、自分の博物館に必要な技術など世界のどこを探してもありはしない。自分で考えてつくり出すしかない。それをお手伝いするのがこの研修コースの役割（森田民博教授・コースリーダー）というのである。

言い換えると、この研修コースに関わる人たちすべてが先生であり生徒だということである。実際この研修コースでは、その考え方が根強く貫かれている。研修期間（6ヶ月）を半分に分け、前半は共通講座として基礎的なことの研修を全員で受けるが、後半は専門講座として研修員の専門・希望に応じて全国各地の博物館に配属し、そこで自分のやりたいものを研修することになっている。この研修システムは研修員からはもとより、配属を受けた各地の博物館からも現地の博物館事情が分かると好評だという。そのことを見る限りこの新しいタイプの技術協力方式はきわめて順調なのである。

技術協力新たな課題

それでは普遍性がないといわれる博物館技術だけが特殊かということ、そうではない。技術協力で途上国が今求めているものの多くが、普遍性のない個別的でローカルな技術なのである。たとえば環境技術がそうである。

環境技術の場合も、博物館技術と同様に、どれほど優れた技術でも現地の実情に合わない限り使えない。その国その地域の経済や社会の発展段階はもとより、気候や地形などの自然条件、さらにはそこに住む人たちの風俗習慣などの生活様式の違いなどで、使える技術は微妙に違ってくる。

こうした普遍性のない個別的でローカルである環境技術は、博物館技術の場合と同じ様に、現地の人たちが自分で開発するしかない。こちらが協力できるのはあくまでも、それを考えるヒントの提供と手助けだけなのである。言い換えると、これまでの技術協力の手法とはかなり違っているということである。

これからますますそのニーズが増えると予想される新しいタイプの技術協力でどう対応していくか。それが技術協力の新たな課題として浮上してきた。

評価をめぐる問題

「博物館技術コース」が文化分野という新しいタイプの技術協力であることは既に記した。そしてその評価がこれまでの手法では難しいことも記した。産業分野などこれまでの技術協力だとその成果が、経済指標などで定量的に把握できる。ところが博物館ではそうはいかない。その技術協力がどれほどうまくいったとしても、GDP（国内総生産）などの経済指数が改善されるなどまず考えられないからである。それは環境分野の技術協力についても同じである。

それでは文化分野や環境分野の技術協力の成果は評価できないかということそうではない。産業分野の技術協力のように経済指標では把握できない。別の手法での評価法が必要であり、「博物館技術コース」の評価にも別の手法がいるということになる。

ところでその評価という言葉だが辞書で調べると、“ものごとの価値を決めること”とある。そのことからいうと「博物館技術コース」の評価とは、途上国の博物館整備のために行った技術協力の価値を決めるということになる。

そうであるとすればその評価に当たってまず必要なのが、途上国における博物館の機能と役割である。博物館が途上国の国づくりでどんな機能を持ち、どんな役割を果たしているかをODAによる技術協力の視点からしっかりと押さえておく。逆に言うとその的確な把握がない限り、評価など不可能だからである。

博物館協力の評価

途上国における博物館の機能と役割はいくつかある。しかしODAによる技術協力の視点からそれを見ると限られてくる。その一つが言葉や文字ではなく民族資料などモノの展示で情報を伝え、国づくりや観光の振興をはかるそれである。

50年代から60年代にかけて、アジア、アフリカなど世界の各地で多くの国が独立した。独立を果たしたそれらの国はどこも多民族から成りその国づくりには、民族の融和が不可欠だが、それには互いの民族が理解を深めることから始める必要がある。

その民族だが、民族学では同じ生活様式を共有する人間の集団と定義している。ということからすると互いの民族が理解を深めるには、互いの生活様式を知るのが不可欠ということになる。ところが民族が違えば言語が異なる。言葉も文字も分からない民族同士を互いに理解させるには「民族資料を展示した博物館が有効であると考えたのは1950年代のユネスコだった」（森田教授）のである。

モノはしばしばコトバ以上に多くを伝えるというが、それを利用しようというのである。多民族で構成する国の国づくりに博物館の機能を活用するというユネスコの考えは、的を射ている。それを知ったのは今回のフォローアップ調査で、ラオスとタイの各地にある博物館で少数民族の展示からである。

ラオスとミャンマーとの国境に近いタイ北部にナンという町がある。その町にある国立ナン博物館の館長が帰国研修員であることからこの博物館を訪ねたが、そこの展示を見て改めてその有用性を思った。そこに展示してあった原寸大の少数民族の夫婦の寝室を一目見ただけで、その民族の生活様式が分かったと思えたからである。

こうした展示を見ていると博物館が民族間の理解を深め、途上国の国づくりに有効であることが分かる。そしてこの国立ナン博物館の館長のような人材養成に関わった「博物館技術コース」の評価も自ずとできてくるとも思えてくる。

文化無償との連携

「博物館技術コース」の評価で見落としとしてはいけないことがもう一つある。ODAの他のスキームと有機的に結びつけて、途上国の博物館整備を総合的に取り組んでいることである。その一つに文化無償援助との連携がある。

途上国の多くの博物館が人材養成と並んで求めているものに、機材の整備もある。ところがどんな機材をどう整備したらいいかがこれまでもうひとつはっきり分からなかった。ところがこの「博物館技術コース」で研修員である現地の博物館関係者と日本の博物館関係者との連携で、それが大きく変わりだした。「現地のニーズと合ったものであれば、大がかりなものでなくても大きな成果があがる」（森田教授）からである。

99年度で研修事業と文化無償という二つのODAスキームの連携による博物館整備がモンゴルとラオスで実現した。こうしたことから見てもこの文化分野の技術協力は高く評価できるし、これからも新しいタイプの技術協力と位置づけて取り組んでもらいたいものである。

VI. おわりに

以上のように、関係者からの事情聴取ならびに現地での実情視察をもとにつぎのような問題点が浮かび上がってくる。

1. 自己満足するわけではないが、帰国者に面接した限りにおいてはコースの運営は名実ともに要望を満たす水準にあったといえる。短期の見学研修では「見た」だけで終わりそうな施設見学も十分に時間をかけて講師・研修員協同の討議を経たことによって確実に情報化されて本国にもたらされたい。より一層の効果を求めるなら、見学先の施設要覧・年報などの資料を事前に英訳しておきたい。

2. 半年の協同生活を経て、同業者間の国際的な交流が生まれたことを高く評価するものが多い。こうしたネットワークは期待した効果のひとつであるが、これからの日本の国際関係を考えるなら、日本滞在を契機に深まった研修員同志の友好関係は私たちにとっても重要なものとなるだろう。

3. 訪問した諸国では観光資源としての期待をふくめて博物館の設置・運営あるいは文化財の保護保存にかなり関心が高まっている。しかしその事業を担当できる専門家の数は極めて限られており、要員のほとんどを前期中等教育終了程度の技能職員に依存しているのが実情である。したがって、次世代要員の養成はまったく手が回らない。唯一タイだけがやっと2、3の大学で養成講座を開講しているが教員層が極めて手薄である。いずれの国にあっても人材育成に対する協力依頼の希望はかなり強く、対応は急ぐべきである。とりわけ中級職もしくはその指導者層の育成に協力するのがもっとも効果的と考えるが、そのためにはタイ・ラオスの共同提案のように共通の現地語が使用できる圏内で帰国研修員を軸に現地研修会を組織し、わが国からは現地での不足を補う講師陣の派遣ならびに必要な教材援助を行うのが適当だろう。

付言

第3者評価担当の斎藤委員が記しているように、「農業や工業の技術なら、技術レベルさえ適切であればそのままどこへでも移転ができる」というのは果たして真実なのだろうか。そして文化に関わる技術だけが「個別でローカル」なのだろうか？

私は、このコースの運営に関わり初めて依頼、明治時代に日本の近代化に貢献した通称お雇い外人教師たちのことをかなり意識している。彼らに関わったほとんどの事項は農学、工学、鉱山学、医学、法学などの実学技術である。一見例外に見えるのは工部美術学校に関わった美術家たちであるが、結果は別として、学校の名が示すように「工部」つまり洋風の近代建築とその周辺環境（庭園、公園など）の装飾家養成が目的だった。外人教師た

ちの指導はおおむね要求を満たすものではあったが、指導を受けた生徒の一部がその後に留学し、あるいは明治維新前後から留学していた若者が帰国して持ち帰った知識や技術と合体したとき日本の近代化技術は確たるものになってゆく。もちろん維新以前に基礎となる学力や技術の教育システムが完備していたことも忘れてはならない。要は外人教師、帰国留学生、受容側の教育水準の3者が一体となって、日本の「風土にあった」外来文化を作りあげたのであり、その基幹部分が技術だったのである。「風土にあわせる」という文化の翻訳を行わなかったら、これほどの技術立国は成り立たなかつただろう。

技術移転を真に考えるなら、研修員を招へいして知識や技術を伝達することと同時に、彼らの手によってそれらを現地の文化の中へ定着させるための方法も一緒に考えるのが効果的だと思う。研修生を指導者（もしくはその候補者）とし彼らをささえる指導助言者を派遣し、現地で現地語による研修を推進することができれば、専門職の不足に悩む諸国にとっても益すること大となるに違いない。このレベルで基礎の基礎教育ができれば、その中からさらに次代の指導者候補を先進諸国に派遣することによって、やがて専門職の養成が自力でできるシステムが出来上がってゆくだろう。

別添資料

- ・公開セミナー講演原稿

21世紀の博物館とその役割
日本の博物館の現状

国立民族学博物館	教授	森田恒之
吹田市立博物館	主幹	藤原学

- ・帰国研修員に対する質問票

21世紀の博物館とその役割

国立民族学博物館 教授
森田 恒之

博物館というどうしても美しいもの、貴重なものを集めて展示してある場所というイメージがついて回る。17世紀末にイギリスで博物館という名の施設が生まれて以来ずっとそうだった。日本語には「博物館行き」という言葉がある。古く、役に立たなくなったもののことをいう。私自信も博物館行きにならないように気をつけたいと思っている。先日英語の辞書で Museum Pieces という単語を見つけた。古く、汚れて、使う気も起きないもののことだという。考えることは誰も同じらしい。

私は日本で約30年博物館行きでない博物館を作るために頑張ってきたつもりだ。来年から21世紀が始まる。21世紀の博物館はどうしたらいいのだろう。私は21世紀の博物館はこれまでと発想を変える必要があると思っている。今日は2つの視点を取りあげてみたい。

工業先進国ばかりでなく世界の至る所で、20世紀の最後の25年間に、人間の生活方法は大きな変化をした。電気のない生活をしている地域はどんどん減っている。電気とともにテレビやさまざまな電気器具が入り込み、いまではコンピュータも特殊な機器ではない。

私たちが生きてゆく中で行っている暗黙の約束を「文化」と呼ぶ。アジアの多くの地域で米飯を主食としている。多くの人が食事といえば米の飯を想像する。これは私たちの暗黙の了解だ。ヨーロッパ人が米を砂糖入りのミルクで煮崩してケーキ材料にするのを見るとゲツとする。

米の炊き方や食べ方も文化である。日本ではかつてどこの家にも竈と釜があった。今日は電気炊飯器が当たり前である。30歳以下の人だと竈を見たこともない人がいる。楽でいいだろうなどといわないでほしい。これは大変なことなのだ。1ヵ月前、つまり1999年と2000年の境目で世界が大騒ぎをした。コンピュータの2000年問題である。大事件は起こらずに済んだが世界中でとてつもない無駄使いをした。もし電気が止まったら竈が使えない人は飯が炊けなくなる。私はそんな現実を実際に目にした。私がいま住んでいる神戸は5年前に大震災を経験した。私の家は幸いに被害がなかったのだが、被災者の中には3日以上も食べるものがなかった人がいる。いま日本では炊飯の火加減を知らなくて生活できる。震災の直後でも米も水も鍋もなんとかあった。しかし火がなかったのだ。

たばこを吸わない家庭では燐寸、ライターなどの発火具がない。斧や鋸もない。壊れた家があっても薪ができない。若い人達は火を炊くために薪がいることを知らない人がいる。知っていても薪の作り方を知らない。生米は食べられないから給食がくるまで飢えて待つしかない。機械化文明とはそういうものなのだ。

第2次世界大戦の直後、とくに都市とその周辺に住む人々は著しい食料危機に直面し、食べられる野草はほとんど食べつくして飢えをしのいだ。それは食べられる野草とその調理法の知識があったからできたのだ。どこの家庭も電気は電灯とラジオまでだった。都市ガスもほとんどなかった。考古学者にいわせると遅くも4世紀初めと基本的な差はないという。1500年以上同じような生活をしてきたことになる。その中でさまざまな生活の知恵を蓄え、私たちは着実に豊かになってきた。いま私たちがどんなに貧しいといっても千年前と比べればはるかに豊かで快適な生活をしている。しかしその豊かさは千年以上の蓄積の上に成り立っていることを忘れてはならない。

千数百年の間に私たちと祖先たちが生み出した巨大な知恵の蓄積をつかの間の便利さのために捨てていいのだろうか。これまで私たちはさまざまな道具を修理し、あるいは似たようなものを繰り返し作り替えながらすごしてきた。それは手作りの歴史だった。ところが今日の産業社会はその伝統を根底から覆そうとしている。

博物館が貴重な歴史資料や美しい美術品を保存し公開する場であるのはいうまでもない。加えて博物館はいらなくなったものや珍しいものを残す場所ではなく、祖先たちが私達に残してくれた巨大な知恵の集積を時代に伝えてゆく仕掛けとしてもう一度見直す必要がある。少数民族の文化を残そうとすることはもちろん大切だ。しかし、それは珍しくなったからではなく、ある特定の生活環境との関係の中で作りあげられた知恵の集積として見直す視点が必要だろう。

もうひとつの視点は観光である。世界には博物館そのものが観光施設になっているものがある。パリのルーブル、ロンドンのブリティッシュ・ミュージアムなどである。しかしこれからはそんな施設を期待することは困難だ。一方で、かつては奥地と呼ばれた地域にも飛行場ができ、地球上のほとんどの土地を訪ねることがそんなに困難でなくなった。探検の対象地だったところが観光の対象になってきた。多くの人々が未知の地を訪れることに関心をもち始めた。探検家たちは危険を避けるために、これから訪れる土地について相当な苦心をしてでも周到な予備調査を必要としたが、観光ではもっと簡単に未知の土地を訪ねたがる。未知の土地でも知ることが多いほど魅力が出るのは当然だが、残念なことに新しく観光対象地となった場所の多くは、その土地について多くのことを知らせるノウハウの蓄積が少ない。

ヨーロッパ、アメリカの大国が19、20世紀の世界を支配したお陰でアジアの諸国の言語は使用人口に関わりなくマイナーな地位にある。お陰で私たちは言語による情報交換が不利になっている。ごく一部の人を除いて、翻訳、通訳なしではその土地の言語はほとんど理解できない。言語に比べて博物館の展示は「見れば分かる」要素が大きい。いいか

えれば、これからの博物館は、自分たちの土地、文化を他の人々に理解してもらえるように見せる努力が必要だといえよう。私たちアジアの文化はアジア人同志の間でさえ未知の要素にあふれた興味深いものであることは間違いない。地球レベルでの人々の交流はこれからどんどん進むだろう。自分たちと異なる言語や生活習慣をもつ人々にも自分たちの日常生活と文化を知ってもらう手段として、もっともっと博物館を利用しなければならない日が間もなくやってくるだろう。

そんな日の一日も早い到来を期待しながら今日の話をお閉じたい。

日本の博物館の現状

吹田市立博物館 主幹
藤原 学

I

我が国の近代博物館は、19世紀後半の国際万国博覧会への参加や内国勸業博覧会の開催を目的とした、資料・標本等の収集活動が契機になって成立したものです。その当時、西洋諸外国から大きく遅れをとっていた日本では、様々な資料を一堂に集める博覧会が、国の近代化のための重要、かつ緊急の政策として、位置付けられていました。そして、このような博覧会の成功を受けて、一時の展示の場であった博覧会は、やがて常に公開する機能を備えた博物館へと発展していったのです。

1945年の日本の敗戦により、政治、産業、土地制度、教育制度などの大変革が行われ、民主主義を基本とした国の運営が始まると、従来の皇室博物館は現在の東京国立博物館・京都国立博物館・奈良国立博物館として改組され、戦後の博物館がスタートしました。戦後の日本は、ひとまず社会の混乱を乗り越えた1950年代から急速に産業経済の発展が始まり、またマスメディアの発達によって、日本全国は中央と地方、都市と田舎の差がなくなって、全国の文化が均質化することとなりました。また、このような都市部の急速な近代化の流れのなか、その反面、都会周辺での大規模な遺跡破壊や、民俗資料・歴史資料の損失を伴って進められてきたといえます。

それに対して、いくつかの有力な対策がとられました。まず1960年代には、多くの地方公共団体による地域史編纂事業が始まりました。これは、歴史というものは国家や権力者の残した「中央の史料」で語り尽くせるものではなく、地方の村や旧家などに残されてきた古文書を再発見し、「地域の史料」で語る地域史を再構築しようとするものです。

次に、開発工事等によって破壊されてゆく遺跡の緊急発掘調査体制の整備が着手され、埋蔵文化財（遺跡）の発掘調査が法律のもとで細かく行われるようになったのです。これには、国のみでなく、都道府県や市町村までのあらゆる自治体はその組織作りと、調査技術の向上に積極的に取り組みました。その結果、大都市や地方の中核都市に限らず、全国の自治体で地域史編纂室や埋蔵文化財調査センターなどの体制の整備が進められてゆきました。この全国規模で進んだ地域文化財の調査体制の整備は、多くの地域歴史資料を公有化するとともに、やがては資料の展示活用のための施設が要求されることとなるのです。

そして、我が国の戦後の博物館設立の最初の大きな波は、1960年代末から1970年代に行われた都道府県立博物館の建設で、その具体的な姿は、その多くが「歴史系博物館」の設

立でした。やがてはそれに連動する動きのなかで、更に小地域をカバーする市町村立の施設が、地域歴史系博物館・資料館として続々と建設されました。特に、国の文化財保護を監督する文化庁は、床面積わずか500㎡という小規模な展示・収蔵施設に対する建設費の補助を行ったため、零細な市町村でもとりあえず一応の文化財保存専用施設の設立が可能となり、多くの地域資料館がつくられました。現在、日本博物館協会に加盟している博物館・美術館・動物園などの館園数は、1,158館であり、未加盟な館をいれると現在の我が国の博物館・美術館等は、3,500館を越えるといわれています。そのほとんどは、戦後に建設されたもので、まさに戦後の日本の博物館は、「地方の時代」なのです。

このような、日本の博物館の歴史をみると、現在では、東京・京都・奈良国立博物館は日本の代表的な美術作品を展示する歴史系美術博物館としての機能を持ち、さらに、自然資料や科学技術資料を展示する国立科学博物館、民族学の一大研究センターとして機能する国立民族学博物館、歴史学の総合研究センターである国立歴史民俗学博物館などがあり、国立博物館は非常に「特化されている」といえます。一方、地方では都道府県立博物館がほとんど設置され、さらに小地域の歴史・文化を取り扱う市町村立博物館や資料館、文化財調査研究センターなどが相互に機能しています。さらに企業のもつ企業博物館から、個人的なコレクションを主体にした個性のある私立博物館まで、多種多様な博物館・資料館が設置されています。

II

以上、歴史系の博物館を主として日本の現代に至るまでの博物館の歩みをみましたが、現代の博物館の機能を具体的にお話するため、私の勤務する吹田市立博物館の活動を報告します。

吹田市は大阪の北に接する人口34万人の中規模都市です。市立博物館は1992年に開館しました。吹田市も都市化によって早くから伝統的な生活習慣が失われ、戦後には大規模ニュータウンの開発や高速道路の建設によって、多くの遺跡が失われてゆきました。このような事態に対して、1974年に歴史の専門家を教育委員会の文化財保存専門職員として採用し、以後、失われてゆく遺跡の発掘調査を法に基づき積極的に行ってゆき、また、民俗資料の収集も市民の協力のもとに進め、次第に郷土の歴史資料が蓄積されてゆきました。

発掘調査や市民からの情報提供が絶え間なく行われ、次第に収集資料が蓄積すると、やがては専用の調査・研究施設が必要とされることは当然の結果であります。多くの資料が集まるほど、その資料を災害や盗難などから守ってくれる、専用施設が必要なのです。そこで市教育委員会は数年をかけて博物館建設のための構想作りを進め、建設工事を経て、1992年に開館しました。博物館は市制50周年の記念事業の一貫として、建設されました。

博物館は延べ床面積は3,297㎡あります。博物館の規模としては、大規模ではないが、

小規模ともいえず、「中規模館」といえるでしょう。博物館職員の数は、市の正職員が15名で、非常勤職員が3名、合計18名ですが、これには文化財保護を担当する7名が含まれています。しかし、警備・清掃などの外部の業者に委託している部分も多く、これらの要員をいれると市立博物館は約25名の人員で維持されていることとなります。

博物館の業務内容は、資料の収集、保管、調査研究、展示などです。なかでも、展示公開が特に重要な部分で、これには、展示事業と講座・講演会・古文書解読講座や民具製作実習講座などがあり、やや特殊な部分としては、大学博物館学の実習生に対する実務研修や、JICAによる外国人博物館技術研修の受入れも実施しております。博物館の業務内容は多様であります。これらを支障なく行うためには、収集・調査研究・展示という3つの機能の設備・人員、予算などがバランスよく配置されていなければなりません。

次に吹田市立博物館の展示方針について述べますと、

- (1) 地域の歴史の流れを、資料を使って分かりやすく展示すること。
- (2) 地域の歴史の特質（地域性）を大きくとりあげること。
- (3) 常設展示以外の特別展の企画も精力的に行うこと。

の3点と言えるでしょう。特別展は、特別展示室（163m²）を使って、1年に2回、開催しています。その企画については、学芸員会議でテーマを決め、予算の策定から、事業の進行も、担当する学芸員が全て運営してゆきます。外部の民間企画会社が準備した事業を館が行うことはなく、全て自主企画事業です。

展示にあたる学芸員は6名で、その専門分野は、考古学2名・歴史学2名・民俗学1名・美術史1名、合計6名です。地域博物館としては、学芸員の専門分野がきちんと確立している博物館といえます。そのため、事業のテーマも、歴史の特定分野に偏ることなく、様々な分野の特別展や講座・講演会などが開催できます。

本博物館の展示の特色は、展示手法にあまり複雑な設備は用いず、実物資料が中心で、資料はガラスケース内展示を主体にしています。展示ケースは全てに完全に密閉化されエアタイトケースを使用して、そのなかに設置した強力な調湿剤によって、日夜の気温差からくる湿度変化を吸収して、年間を通じて常に一定の最良の湿度が維持されています。光線の質(ka)や量(lux)についても、最適なもの選ばれていることはいまでもありません。常に高温多湿な東南アジアの博物館にとって、収蔵庫と同様に、資料の置かれる展示ケースの湿度管理が非常に大切なのです。

市立博物館では、博物館での虫菌害の発生に極力注意を払っています。館に収蔵されてくる資料については、常に一定の期間、観察をし、必ず洗浄される埋蔵文化財以外の資料は、館に備えつけられた独自の密閉燻蒸装置を使って燻蒸処理をして、虫卵菌を除去した資料のみ収蔵庫や展示ケースに入れていきます。さらに1年に1回は収蔵庫ごと燻蒸しています。ただ、その薬剤については、地球環境の保全の観点から多くの問題を残し、新たな防除方法や処理薬剤の開発の必要性に迫られています。したがって、東南アジア全体の問題として、白アリ対策などを含めて、将来の虫菌防除についての大きな不安を残していま

す。ただ、吹田市立博物館では、学芸員自らが資格をとって燻蒸業務に当たっているところに特色があり、そのような虫菌害防除についての専門の知識・技術は、多くの資料調査における虫害の発見やその対策のために活用されています。

[スライド]

III

最後にあたり、学芸員の立場から、博物館の役割とは何かを示しておきましょう。東京方面に出張したときには、わたしはある東京都内の小さな古めかしい資料館によく出掛けてます。その目的のひとつは、その館内には約80年前の一般庶民の住宅や生活をリアルに再現した展示室があって、そこには来館者が自由に書き込んでいいノートがさりげなく置いてあり、そこに多くの来館者が、博物館の展示についての実に様々な意見を書き込んでゆくのです。実は、私はそれをくまなく読むために行くのです。

そこで、あるページを開いた時に、私は非常な驚きを感じた文章に出会いました。その記録を残した人は、27～28歳の女性だったのですが、「東京のある男性と結婚する為に、初めて東京へ出てきて5年が経ったが、その間、やや内向的な自分は都会生活で自分を主張することができず、隣人などの環境にもなじめず、ずっと今日まで心の安らぎを感じた生活が全くなかったが、この資料館へ偶然に来てみて、初めて自分として心の平安を感じる場所にめぐり会った。」と書かれてありました。

人間ですから個人的な性格の差はあるでしょうが、都会生活の表面的な便利さが、人間に精神的な苦痛を与えていることもあるわけです。このような内向的な人が、博物館の展示に初めて心の平安を感じるのは、博物館展示が都会の喧騒から途絶された静寂のなかにあるからではなく、その展示が古めかしいスタイルであるからでもなく、その本当の理由は、その人にとって、おそらくここの展示そのものが「自分の生い立ちや性格などの主張や考え方をじっと聞いてくれるところであった」からではないでしょうか。わたしにはそのように思えるのです。

博物館展示は、見せるほうが知識を一方向的に与えるだけでいいとは限りません。観覧者に一定の情報さえ示せば、あとは観覧者と資料がゆっくりと対話し、双方で理解しあうものなのです。ゆっくりとモノ（資料）をみるためにも、整理された最適の情報は必要ですが、多すぎる情報も、過敏過ぎる情報も不要なのです。この観点からみると、実は、日本の最近の多くの博物館展示の実態は、余りにもメディア（媒体）に頼りすぎ、複雑な手法で、展示を構成しようとしているような気がします。それは、本当の博物館展示でしょうか。このことは、博物館を建て、そして運用する上において、本当に費用をかけなければならない所は何か、そして、学芸員は何を考えて展示せねばならないかを教えているように私は思うのです。

東南アジア諸国が、自国の博物館の建設・運用を計画するにあたって、その国独自の考

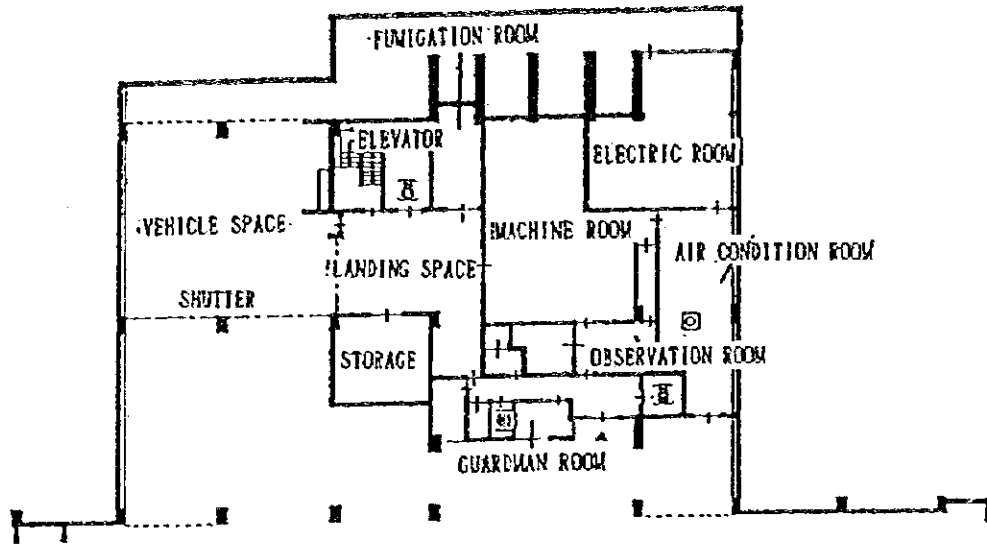
え方があるはずですが、ただ、明らかにいえることは、やはりアジアにあっては、国や地方
 行政府が、率先して博物館を建設・運用し、それを拠点として地域の文化財を守り、保護
 してゆく必要性が大きいのです。第二次世界大戦後の日本の埋蔵文化財の調査と保存がそ
 うであったように、文化財の保護施策を急速に、確実に進めるには、公権力しかできない
 部分があまにも多くあります。そしてその結果、多くの遺跡や遺物、そして歴史的資料
 が公有化されたため、貴重な資料が散逸したり売却されたりすることが防止され、資料の
 一般公開が進み、一定の基準により、慎重かつ安全な方法によって資料の保存修理が行わ
 れ、文化財の価値を高めることとなったのです。

このように、博物館は中央にあっては国を代表する考古学資料や歴史資料、あるいは美
 術作品を保存し継承して、国民、あるいは外国のツーリストに公開する施設であるとも
 に、地方にあっては、いままであまり評価されていない地域文化財を捜し出し、調査して
 それを保存、継承してゆく重要な任務があります。そして、そのような成果を地域で公表
 することによって、地域の住民がその地に住んでいることについて、誇りと自信をもつこ
 とが出来るのです。博物館はそのような重要な役割をはたす拠点施設となりうるのです。

吹田市立博物館の組織図 ()内は非常勤職員

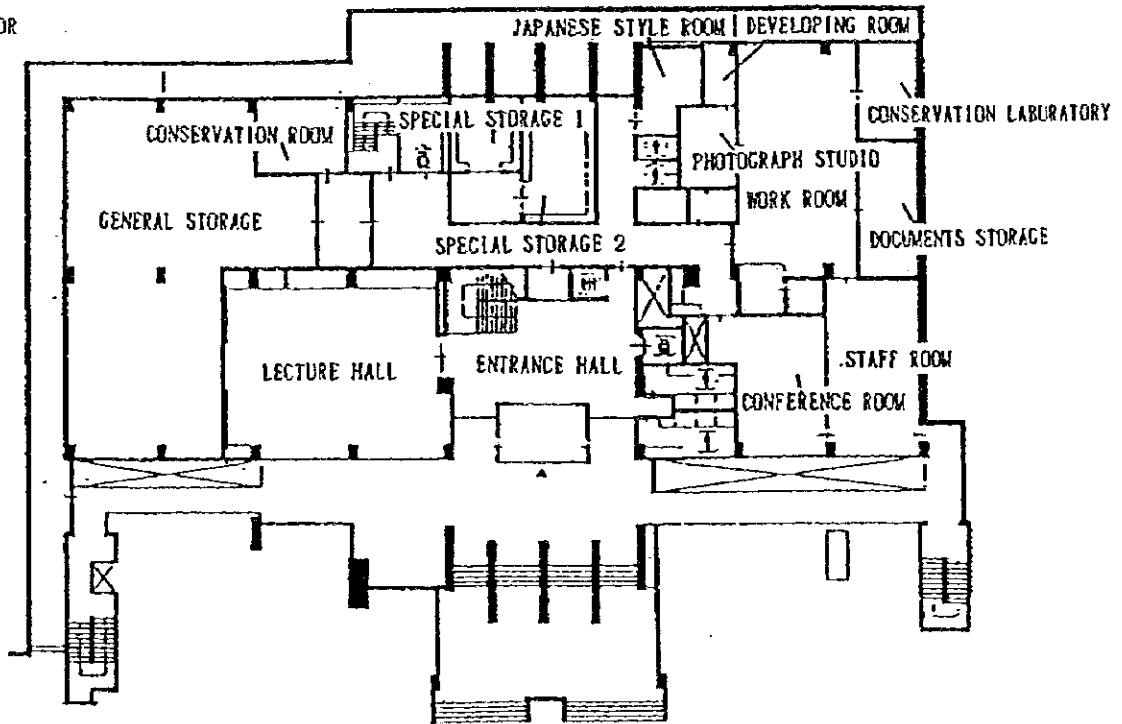
.....		
・ (館長)	・ 副館長	・ 主幹	・ 庶務係長
	・ (課長級)	・ (課長代理級)	・ 事務員
		・ (考古学)	・ 学芸員 (考古学)
		・ (係長兼務)	・ 学芸員 (文献史学)
・ 博物館協議会			・ 学芸員 (文献史学)
			・ 学芸係長
			・ 学芸員 (民俗学)
			・ 学芸員 (美術史)
			・ (嘱託員・学校教育)
		・ 主幹	・ 文化財保護係長
		・ (課長代理級)	・ 発掘担当技師
		・ (係長兼務)	・ 発掘担当技師
			・ 発掘担当技師
			・ 発掘担当技師
	・ 文化財保護審議会		・ (発掘担当技師)
			・ 事務員
.....		
	外部業者への委託による業務員	・ 警備員	2名
	(7～8名)	・ 受付案内	1名
		・ 清掃員	3名
		・ 機械保守監理	1～2名
.....		

1st FLOOR

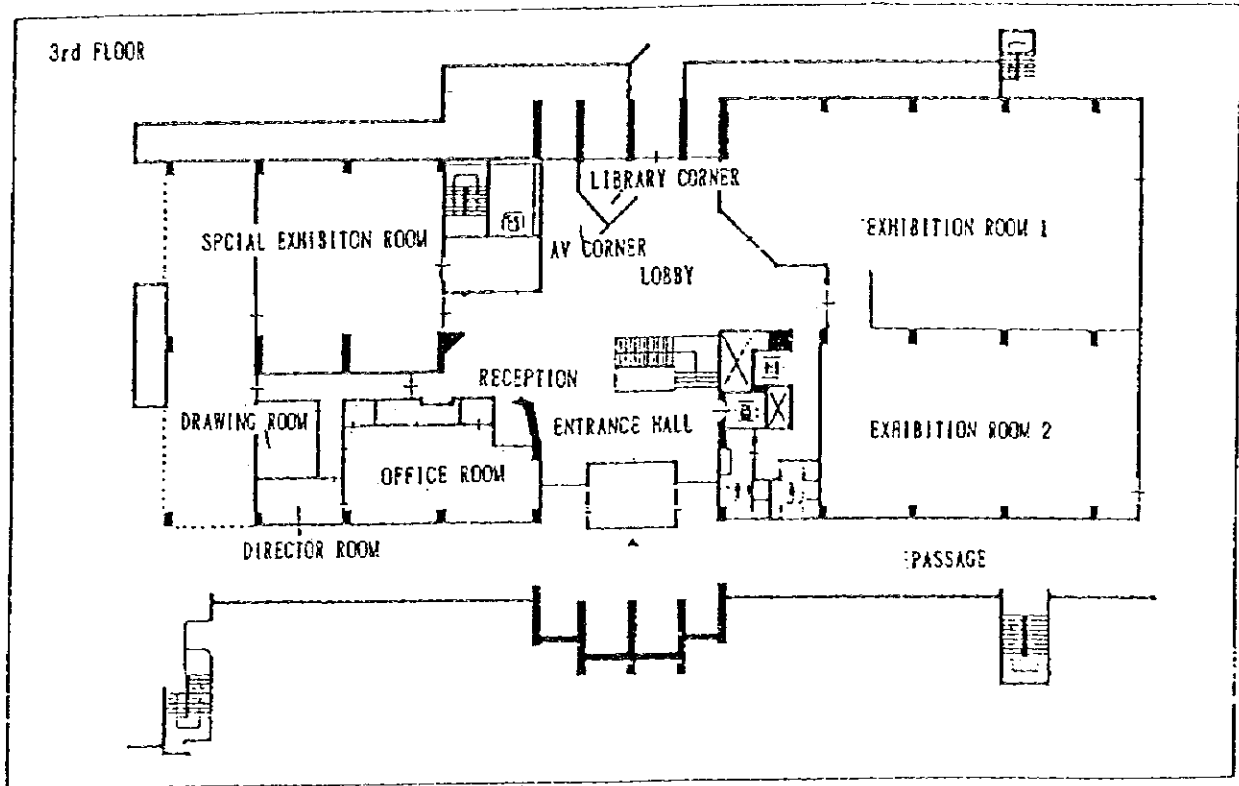


3

2nd FLOOR



4



1. 援助窓口に対する質問内容

MUSEUM MANAGEMENT TECHNOLOGY COURSE
Questionnaire to the organization which nominates applicants
(Please type in English)

Name of Organization: _____

(1) How do you evaluate the group training course in "MUSEUM MANAGEMENT TECHNOLOGY" from the view point of the national policy? (政策との関連)

(2) Is it difficult to choose appropriate organizations to which GIs (General Information : course brochures) are distributed? (GI配布機関)

A. difficult

B. not so difficult

If you choose A, give the reason.

(3) How do you select applicants? (窓口機関での候補者人選)

(4) How do you evaluate the training course which participants of your country attended ?

(帰国後の窓口機関での研修成果の確認)

(5) Are there any other similar training opportunities rendered by other foreign countries ?

A. Yes

B. No

If you choose A, give an outline of the training. (他機関主催の研修との比較)

2.研修員所属先に対する質問内容

MUSEUM MANAGEMENT TECHNOLOGY COURSE
Questionnaire to the organization of the ex-participants
(Please type in English)

Name of Organization: _____

(1) Does your organization place any examinations to select the applicants ?

- A. Yes B. No

If so, please itemize the qualifications to be examined. (選考基準)

(2) Choose and answer on each item. (コース・G1)

a. Duration of the course

- A. too long B. about right C. too short

b. Qualification

- A. too specific B. about right C. too wide

c. General Information

- A. unclear B. about right C. too precise

(3) Do you have any systems to disseminate the knowledge that the ex-participants acquired in this training course ? (研修結果の普及方法)

- A. Yes B. No

If so, what kind of system is it?

- A. seminar B. reports to be delivered C. others

(Please give examples)

(4) Does participation in the training have influence on promotion of ex-participants in your organization? (研修参加と人事評価との関係)

A. a lot B. somewhat C. no

(5) Do you think this training is beneficial to your organization? (所属先研修成果)

A. very much B. somewhat C. no

If so, give the reason of it.

3. 研修員に対する質問内容

MUSEUM MANAGEMENT TECHNOLOGY COURSE
Questionnaire to the ex-participants
(Please type in English)

Full Name _____

Employment

Present Post / Title _____

Name of Organization _____

(1) Employment / Work Experience

a. Before Training at JICA (研修前職歴)

Job Position / Title	Responsibilities	Period (from / to)

b. After Training at JICA (研修後職歴)

Job Position / Title	Responsibilities	Period (from / to)

(2) Evaluation of the training programme. (研修コース評価)

a. Can you apply the knowledge acquired in the training to your present job ?

Please check (×) one of those. (研修成果適用度)

_____ all _____ most _____ some _____ a little _____ none

Please state your answer briefly.

Various constraints

_____ economic situation

_____ brain drain

_____ poor management

_____ no suitable training

_____ too much foreign influence

_____ political situation

Please describe the problems in detail.

(3) Please give us your suggestions for further improvement of this training.

(4) Please draw a detailed chart of your organization and indicate your position in it as well as the number of persons in each department, division, section, work team, etc. (研修員所属先の組織図)

